

を爲せり。然れども是れ殆んど何の効もなく、剛直峻烈武氏の如きも、此度こそは敗北せりと自覺して反對の鋒を收めたる程なりき。斯くの如く千八百六十二年は苦戦痛闘の間に暮れて、翌六十三年には、多年懷抱せる土地法の問題に就きて盛に辨論せり。於是氏が社會に奔走せる初よりして常に上流社會の機關として反對の地位に立たるイムス新聞は、忽ちロツクデールの二グラカイ(マラツカス兄弟は羅が馬古代の民權家なり)が云々せりと誣妄の事を掲載したるに、其一頁たま〜格氏の眼に觸れ、氏は直ちに辨駁の書を寄せたれども、イムスは之を掲げず、猶無禮の返書を送りたれば、格氏は則編輯人デイレーン氏に宛て、大に駁難の鋒を向け、筆戦いよ〜激して格氏の論鋒ます〜鋭く、終にデイレーン氏をして其非を陳謝せしむるに至れり。

我、民は實に卑屈に、且門閥愛好、貴族依賴的の人民なり。彼等が土地を

尊敬すること殆んど其貴族門閥を崇拜するに侔し。人民中二十分の十九は土地所有に與かることなきのみならず、彼等は數エーケルの土地をも所有するの價値なしと自ら思ひ居るなり。されば若し茲に國中の地所を小部分に分別すべしと主張するの政治家あらば、人民は直ちに之れを以て、女皇陛下及貴族等を顛覆して共和政府を建んと欲する革命共和論者と見做すべし。今日に當て此問題に近寄るの道は、只經濟的議論の一あるのみ。

是れ十五年前氏が武氏に寄せたる書中の一節なり、而して十五年後のイムス新聞は、二氏を誣ゆるに恰も此語を以てせり。土地法に關する一般の輿論の遅々として遙に二氏に後れたるを以て知るべし。

千八百六十四年米國の紛紜猶未だ局を終へざるに、日耳曼、丁抹の間に戰爭破裂し、其弱きを援けんか、將中立を布告せんかの問題、英國々會に

沸騰せり。此時に當り、格氏の演説せる如く、英國の外國貿易殆んど舊時に三倍し、過る二十五年間に於ける製造事業の發達は、過去一千年間の發達に二倍し、年々の輸出額も一億六千萬磅に上る程なれば、戦争好み
の英人もおのつから外係累を避けんと欲するの念を起し、終に今回の紛紜に立入るを肯んぜざれば、流石の巴卿も遂に一着を讓りて斷然中立に決したる旨を議院に告白せり。殆んど十八年間失敗相繼で、一たびも頭を擡ぐる能はざりし格氏が平和の大主義は、一生の末路最後の國會に於て、僅かに成功の緒を露はし來りたるを見るべし。
此歲十一月、格氏は其撰擧區たるロツクデールに到り、一場の長演説をなし、萬般の問題に關するの意見を開陳せり。其外交を論ずるの條に曰く、
余が始めて筆により、また音聲によりて、我感情を公衆の前に告白せ

しより、今に至るまで茲に三十年、外交事件に關しては、余は無關涉の主義をば尤大事に維持したり。苟も内、好良なる政治を確固ふし、外、無限の紛紜を避けんと欲せば、我國のよろしく信奉すべき箇條は此外にあらずと信じたり。惟ふに著しく政治に奔走せし人々の中、我友ブライト氏及余が如く常に外邦人民の爲に我國威を振ふ事を避けたる者なかるべし。夫れギルドホール其他の集會に赴き、波蘭人、匈牙利人、若くは他の千里以外の國民の爲めに、痛快激烈の演説をなし、瞬刻の間に夥しき喝采を得、人望を博ふする、何ものか此より容易なる事あらんや。然れども余は常に感せり、苟くも斯くせば、我憐む所の人々に却て幾多の禍害を及ぶの虞あるを。余は望む、何人たりとも、我友ブライト氏及余、其他共に盡力せる自由貿易論者は、彼の公會に、新聞に、外邦の事を論ずる紳士等に比して、他邦を思ふと薄しと想惟するなからんこ

とを然れども凡そ人の最も盡すべきは自國の内にとありと余は信す。即ち我國內に在て貿易、學術、政治、宗教、其他萬般の自由の區域を擴張せんと務むるところを即ち其最上の職分なりと思ふなり。何となれば、自國の内にとありて自由の爲に力を盡すは是れ即ち全世界に於ける自由主義の進歩の爲めに力を盡すものなればなり。

轉じて土地法の問題に到り宣言して曰く、

不幸にして余は已に六十歳に及べり。若し二十五歳若くは三十歳ならんには手にアダム・スミスを携へ(余はアダム・スミスの外に出でざるべし)政治の上よりせざるべし。恰も穀物に關する自由貿易同盟のありし如く、土地に關する自由貿易同盟を組織すべし。諸君は彼此共にアダム・スミスを根據となし得べきなり。而して政治的、革命的、急激的、または券狀黨的の運動によらず、必らず成就すべき的運動、即ち政

治兼經濟的運動をなさば、事必らず成就すべし。諸君若し土地及勞役の上に自由貿易を應用するあらば(即ち教區居住などに關する一切の惡制を除き去るによりて)余は敢て云ふ、之を成就するの人々こそ、我儕が曾て穀物上の自由貿易を成就したるより、一層の大功業を英國に盡すものなりと。

更らに議院改革を論じて曰く、

人或は諸君に告げん、また諸君自斯く思ふとあるべし。中等社會は現に議院を支配すと。是れ大なる謬惑なり。今や、中等社會の分子の議院を占むること甚だ少なく、而してまた愈減少して、議院は終に一箇の富人俱樂部とならんとす。諸君の要する處は平民的分子の注入にあり。然れども一般人民の政權擴張せらるゝにあらずんば、決して斯くならず能はざるべし。中等社會の方々に告ぐ、此れたゞ勞役者流の問題

と思ふなかれ……今日の如く、經濟の主義は已に勞役社會の地位を高め、器械の發明發見は益々之を高ふせんとするの時代に當りて、諸君は彼勞役者の一大團をば、何時まで撰舉權の範圍外に杜絶し得べしと思ふか。

最後の演説

此れ氏が最後の演説なりき。

病に臥す
議院改革
婦人撰舉
權を賛成す

已に衰弱せる氏が身躰は、此長演説の爲め一層の衰弱を來し、ロツクデールより直ちに家に歸りて病床に就けり。然も氏が有爲の頭腦は猶政治の問題を脱却せず、議院改革の如き、呻吟の際に於て深く考案を凝らし、氏は尤も代議制の品格を高ふせんことを欲したり、故に婦人撰舉權をも賛成せり。曾て一友に書を興へて曰く、
余は思ふ、腕力愈衰へ、道義力の愈盛なるに従て婦人の地位もますます上らむ。世の始めよりこのかた、婦人の地位を高むる事に於て尤力多

かりしは基督教なり(假令其實際は未だ其標準に達せざるにせよ)而してクエーカー派は基督教を實行せり。之を以て其派に屬する婦人は、イーゲの子孫中尤も他性と同等の地位に近けり。余は常に腕力を廢し、更らにまされるものを以て之に代へんと欲するが故に、婦人撰舉權の事に就ては、足下の令嬢と共に力を協す者なり。

千八百六十五年

此外、議員改撰期限を短ふして其永續より起る弊害を矯め、球票を設けて強迫脅嚇の惡習を革め、撰舉費を撰舉區より支出して、以て賄賂の道を塞ぐ等は是れ氏が尤も心を傾けたる處なり。千八百六十五年一月、氏は病床の中より武氏に書を送て曰く、

小撰舉區を可とす

凡て或る階級若くは團躰の撰舉に漏るゝとあらんと懸念する人々の望を遂ぐるが爲めには、成るべく撰舉區を多くするが宜しかるべしと思ふ。故に余は各撰舉區より一名の代議士を送ることを主張す。

遂に素志
の實行を
見す

例へばボルミンハムに六人の議員ありとすれば、之を六區に別つたり。斯くせば如何なる部分も必らず其望を満すの機會を得べし。然れども格氏の眼は遂に其素志の實行を見ず。數年の後、其半身たり繼續者たる武雷土氏が議院改革を成就したる時は、格氏は已に冷やかに墓中に眠れり。

政府會計
局長
の職を格
氏に授け
んとす

政府は格氏の功勞を思ひ、具氏をして會計局委員長の職を薦めしめたり。是れ其年俸は二千磅に上り、而して勞は尤も少なきを以て、格氏の爲めを慮りて斯く計ひしなり。然れども格氏は懇ろに厚意を謝し、身軀の衰弱復事に堪へざるを告げ、且躰力の堪ゆる限りは、寧ろ議院に列りて、政府の冗費使用を遏めんと欲する旨を答へ、猶家にありて靜かに病を養ふと數旬、三月の半武氏尋ね來りて懇ろに氏を慰め、亦當時議院に沸騰せるカナダ州兵備擴張問題に就て相論し、和風温日の折々ハ共に野外を閑

武氏來り
訪ふ

格氏倫敦
に赴く

歩し、留ること數日にして倫敦に歸れり。

武氏去りて數日、格氏は國會に出で、カナダ一件の討論に與からんと欲する念を抑ふる能はず。終に其夫人及令嬢を伴ふて、ヘーショットの孤村を立出たり。時正に三月の末なれども、芳草未だ綠りの氈を展べず、寒風颯々として、柏樅の髪を梳り、一望山野蕭條たり。つくづく風景を眺め居たる夫人は、顧みて格氏に謂て曰く、

一生奔走
に暮れて
終に家庭
の幸福を
味ふに暇
なし

御身已に多くの良き働きをなし、高き名譽と地位を得玉ひしなれども、若し御身と妾と婚せる後、遠きカナダの林に行きて、靜かに住みしならむには如何ばかりか二人の爲めに宜しかりしならんと妾は時々思ひ侍るなり。

と聞て、格氏は、悽然車窓より暫く風景を打眺め、實に御身の宣ふ如し。

倫敦の旅
館に病に
臥す

無情の東
風

靈海然光
明の國に
入る

と答へて、不思議一嘆を漏らしたり。

斯くて氏は倫敦に着して成るべく國會に近く旅宿を定め、直に敷通の
手翰を認めしか、忽ち喘息を引起し、復病床を起つ能はず。打臥したるま
ゝ前家の烟筒より立昇る烟の西に靡くを眺め、其方向の變ぜんを欲
したるも無慈悲の東風(東より吹くは寒風に尤も病人に害あり)終に其攻撃を止めず。病は
變じて氣管支焮衝となり、今は恢復の望絶えれば、夫人令嬢及武氏等
は病床を環りて暫らくも立去らず。時まさに安息日の朝に際しセント、
マルチンの曉鐘瓊々として響き渡るを聞き残しつゝ、格氏の靈は淹然
光明の世に入れり。實に千八百六十五年四月二日にして、六十一の齡は
二ヶ月を缺けるのみ。越て五日、武氏具氏を始めとし、故舊齊しく棺槨を
擁してラウブングトンの寺院に到り、幾行の哀涙と共に、其愛兒の墳の
傍に葬れり。

邇氏格氏
を讀

訃報達する所、幾多の家庭齊しく涙を濺ぎ、國會に於ては、巴卿具氏を首
め、諸名士交々立て其悲を述たるが中にも、保守黨首領ヂスレリー氏は
起て悼傷の感を述べ、且讀して曰く、

此等の大人が相繼て世を去り、玉ふは實に悲嘆に堪へざる所なり。然
れども此等の大人は全く逝き去り、玉へるにあらず。其言語は屢議院
に引かれ、其例は屢語り及ばるべく、亦其形容すら我儕が討論の一部
を形造くると思へば、聊か心を慰むるものあるなり。余は敢て言ふ、假
令其身現に國會の中にあらざるも、國會の解散に關せず、撰擧區の亂
佚に關せず、時日の推移に關せず、依然として國會の議員たる方々あ
り、余は思ふコブデン氏は即ち其一人なり……他日百世の子孫がゴ
ブデン氏の生涯に判決を加ふるの時は、余は信ず、彼等は應さに斯く
云べし、其言、其行を察すれば、疑ひもなく、彼は我國の中等民族が産出

したる最大の政治家なり、國會の粧飾なり、英國の光榮なりと。

第十五章 献身的政治家

今を距る二千年前、地中海の東岸、香柏木、橄欖樹、乳蜜流、葡萄肥て、迦南の地に、絶代の異人を生じたり。而して其人民は無殘にも彼を燬、原上に磔殺せり。降て千六百年、海の北岸、日麗らかに風香しきトスカニの野に、曠世の學士を出したり。然して渠曹は其の書を焚き、其の軀を縲綖に繋ぎたり。上下三千載、縱横六大洲、真理は常に偏僻の爲めに苦しみ、進歩は多く固陋の纏羈に惱まされ、人類の最大恩惠者は往々にして

格氏は英人にして、十九世紀の人物にあらざる

眼中只一人類あるのみ

人類の最大不幸者たるの命運を免れざるを知らば、又奚ぞリチャード、コブデン氏が苦痛辛酸の一生を涉りしことを是れ怪まんや。蓋し格武電氏は英國に生れ、十九世紀の世界に棲息したりと雖も、決して英人にあらず、また十九世紀の人物にあらざるあり。彼の群小政治家が營々として蟻垤の邦境を争ひ、蠢々として勝を鏘銖の間に競ふの中間に立ちて、絶大なる格氏の心胸は、直ちに個々分離せる虱小虻大の國境を一掃し、其眼中には亦英國なく、佛國なく、黄色人なく、黒人なく、スレヴァニアなく、チュートン人なく、視る所只一人類あるのみ、望む所只一人類の進歩あるのみ、其の朝に思ひ寢て想ふ、只一の希望は、外は富のますく、擴布して形骸上の程度の進歩し、内は智識徳義の愈膨脹して、心靈界の標準昇騰し、共に其福祉を享有するの一事のみ、其の戦争を攻撃し、平和を主張し、万國海上法を切論し、自ら進んで英佛通商條約

締結の難衝に當れる所以のものは何ぞや、即ち只一の希望を有すればなり、其の畢生の心血を枯らして、自由貿易を主張したるものは何ぞや、其希望を達するの最大利器なるを信ずればなり、自由貿易素より以て家國を富すべし、有を運し、無を通し、以て無數の利益を願つべし、然れども格氏の眼中に於ては是れ只第一着のみ、只一の手段のみ、曾て演説して曰く、

余は信ず、自由貿易主義の勝利が人類に及ぼす利益の中に就て、物質上の利益の如きは是れ實に些々たるものに過ぎざるを、余は更に一重の前程を望むなり、即ち自由貿易主義の徳義世界に於ける、恰も引力の宇宙に於けるが如く、人種、信仰、言語の乖隔を一掃して、人類を一團に結聚し、限りなき平和の紐鎖の中に連結するを見るなり、豈に雷如斯きのみならんや、余は朦朧たる將來に於て、幾千年の後に於て、

此の主義の勝利の結果の果して如何ならんかを臆察せり、否夢想せり、余は信ず、其結果は現今の政度と全く其類を異にしたる政度を導き來り、全然世界の面目を一新すべし、即ち強大の帝國、強大の陸海軍等、總て生命を屠戮し、勞力の報酬を破壊するが爲めに用ひらる、物は皆盡く消散すべし、何となれば、人類已に一家族となり、同胞互に其勞力の結果を自由に交換するの時に於ては、斯の如き物はまた用ゆる所なきを知らばなり。

其所謂自由貿易とは何ぞ。

自由貿易！自由貿易とは何の謂ぞ、國民を隔離するの障礙を打破する即ち是なり、即ち傲慢、復讐、嫉惡、妬忌等常に國民間の連鎖を破り、鮮血を漲らし來るの感情を、隱伏せしむる、彼障壁を打破するの謂なり、語を換へて之を言へば、

自由貿易は上帝の萬國公法なり。

萬國公人
無籍者

空漠の論
者にあら
す

一世の改
革は先一
國より始
むべし

格氏が自由貿易を主張したる精神已に斯くのことし。是れ佛國外務大臣ドルヴェイン、テ、ルウイ氏が「格武電氏は實に万國公人なり」と讚嘆したる所以なり。是れ斗屑の陋鷓等が「無籍者」と嘲罵したる所以なり。然れども、格氏は決して理想の光りに眩まされて現在の事物を打破する空漠の論者にあらざるなり。曾て人に語て曰く、

苟くも時と勢を問はず、只理論を以て嚮導とし、萬般の問題盡く我信ずる所を以て之に當るべくんば、余は又何の憚る所ありてか、共和論者とならざらんや、夫れ共和政治は自由人民に取て最上の政体なり。然れども余自ら我英國の爲めに之を主張したりとて、果して何の益にかなるべき。

時に遅速あり、勢に強弱あるは、是れ格氏の知悉せる處、此を以て氏は、一

義俠心なき怯漢

世の改革は先づ一國の改革より始むべしと覺悟せり。故に氏が理想の眼は遙かに人類の上によりて、其實際の眼は未だ曾て英國てふ物躰を忘れず。其の穀法を排撃したるは、自由貿易の基礎を英國に開けるなり。其戦争を論駁したるは、即ち平和主義の源泉を英國に啓けるなり。土地法を攻撃し、教會自由を擴張し、一弊も之を撃ち、一利も之れを興せしは、何故ぞ。英國の平和、自由、徳義、智識、富源を擴張して、以て全世界の氣運に鞭たんと欲せるのみ。即ち爲し得る所を成して、爲し得ざる所を成すの地を造れるなり。苟しくも平和の主義に基き、道義の大法に據らば、格氏は機を窺ふて其の理想に近かんとするを躊躇せず。然れども、兵を擧げ、旛を捲き、自家の門戸を打ち棄て、千里の外に出陣し、以て無數の禍害を播し來る所謂義俠的の舉動に到ては、其斷じて爲さざる處。是れ戦時の急劇者、平和の保守黨たる英人が曩きに無籍者と罵しりたる唇を反

して、義侠心なき怯漢と嘲りたる所以なり。如斯く、格氏が一國を擧げて改進の風潮に投ぜむとするに當り、満身の力を注いで其進路を遮るものあり、封建世界の殘物は是なり。千八百六十三年氏は左る人に書を予へて曰く、

此のウアット、アークライト、ステウエンソン等の代に當り、此の反對主義の發達せる中央に於て、封建的精神は猶ほ未だ繁盛せり、否日々に益々政治社交界に横行せんとす。而して其力の強大なるや、宜しく應に新文明の主導者たるべき人々をして却て封建的精神を扶助し尊敬せしめんとす。彼商人、製造家等が切りに富を望むも、なべて封建の足下に跪かんと欲するが爲なるを見る。吁、是れ如何せば已むべきか。

格氏が嘆聲を發したるも固に宜なり、十九世紀の四分三は實に是れ進

歩の風潮が一瀉千里の勢を以て、英國の政度、文物を一新せる時代なれば、保守分子の反動も亦一層の激烈を極めざるを得ず。穀法の戦に於て、正面の敵となりたる農利黨も、平和の争に於て對壘したる主戰論者も、其改進黨たり、保守黨たり、政府たり、人民たり、ヂスレリたり、パルメルストーンたるを問はず、盡く是れ封建制度の餘殘が劇しく反動を試みたるものにして、風潮漩渦の時代なれば、彼我錯絡、敵味方地を換へ、自由の皮膜に保守を包み、保守の招牌を自由の店頭に掲ぐる等、奇々怪々の現象を生じ來れるも亦自然の勢のみ、是れマンチエストルの一派が彼によらず、亦此れによらず、常に其中間に立ちて、斷々乎として、獨立の方針を執りたる所以なり。

封建分子ハ已に改革の進路を遮れり、如何にして之に當るべきか。格氏が炯眼は今や方に頭を社會に擡げ來らんとする一階級を發見せり、是

れ氏が率て以て敵に當らんと欲したる一隊なり。其一隊とは何ぞ中等社會即ち是なり。商工民族即ち是なり。氏曾て書中に述べて曰く、其の過誤多く欠點多きに拘はらずや、以て封建社會を制するに足るべき富と政治上の勢力を有する者は只商工社會のみ。今日に當り依て以て有益の改革を行ふの望あるものは實に只此民族のみ。渠曹素より其の貴族に對するの舉動に於て往々怯懦卑屈なることあれども、若し渠曹を我政友となさんとせば、其弱點はよろしく恕する所あるべきなり。且彼封建社會は經濟の大主義を破らざれば存在するを得ざるものなるが故に、其制度は自から公益に反するものなれども、商工社會に於ては其要する所更に一般の公益に反するものなきは是れ實に進歩の望を與ふるものと云ふべし。余は渠曹が自尊の念をば一層鼓舞せんことを望む。

中等社會の下部より勞役社會の上部にかけてたる一隊

而して殊に中等社會の下部より勞役社會の上部にかけてたるの一隊なり。曾て武氏に書を寄せて曰く、土地相續の法否習慣は、貴族の特權に根せるのみならず、亦上流の中等社會の偏僻に根せるものなり。彼貿易製造の諸大都府に於ける富豪の跋扈は、實に此制度の改革に取て恐るべき障礙なり。但爰に一の慰むる所は次第に中等社會の列を下り、勞役社會の聰明なる者に近くに従ひ、封建的偏僻の愈減少することなり。

また曰く、健全なる急進主義は、大都府の中よりも、寧ろ小邑小都の中に撒布せるを見る。

また曰く、ボルミンナムに於ける政治、社交上の情態は、マンチエストルよりも

甚だ優れり事實は他なし彼鐵器製造地(ポルミン)に於ては業を執るもの皆小製造者にて使雇する所は數名の大人小兒に過ぎず時としては僅に一二人の職工を用ゆるのみ之に反してマンチエストルの大銀主は皆一種一團の貴族を組織するものにて時としては各々二千名以上の人を支配することなり。ポルミンハムに於ては各階級自由に交通するを得然れどもマンチエストルには職工と雇主との間に涉るべからざる深淵の隔るあり斯の如き社會の情態は果して民主的政治運動の爲めに宜しかるべきや余は疑なき能はざるなり。

上流の中等社會は常に貴族的に傾き易く下流の勞役社會ハ未だ與に爲すべからず格氏が其中間一隊の勇將となりて之を訓練教導し自尊の念を鼓舞し進取の氣象を慫慂し議院改革教育普及を主張して政治徳義及知識上の進歩を予へ以て封建社會を覆さんと欲したるは之が

爲めのみ。

然らば即ち格氏の心情知るべきのみ。其中等社會を揚ぐるは以て封建分子を抑ふるなり。封建分子を抑ふるは以て一國の改革を開く所以なり。一國の改革は即ち一世の改革なり。一世の大より小は以て一階級の未に至る迄氏が滿腔の精神は唯一の人類進歩の中心點に集合せり。

如斯く氏が期する所は極めて明極めて瞭更に暴虎の嘲を招くべきものはあらざるなり。然れども世は己よりも進めるものを容るゝ能はず。是れ格氏が一國の公利を計れば一階級に障へられ萬國の公益を圖れば一國の偏僻に礙げられ十年の功勞も一朝の反對に埋没せられて苦辛痛酸曾て安息の暇なく白髮早く頭に上り一半の素志を親友の手に剩し將て終に世を辭したる所以なり。然して氏は心情を述べて曰く、余は失望の教唆者にあらず。若し世間自ら己が一生の經歷に満足す

る者あらんか、余は即ち其人なり。
蓋し氏は朝に「ホザナよ」と呼び、夕に「十字架に釘けよ」と叫ぶ浮噪の衆口に一身の喜憂を委ねず、荆棘の冕即ち改革者の榮冠なるをかり、自ら信ずる所を以て、自ら安ずる所を行なへるなり。献身的政治家の面目夫れ此處にある歟。

第十六章 人物及性向

格武電氏は尤も卑俗の境遇に成長したる人物なり。赤貧の農家に生れ、商館の筆生となり、糊口に驅られ、身を繞るは盡く損得儲喪の空氣のみ。

卑俗の境遇

清秀の氣象

憂愁の境遇

快活の精神

然して格氏は此汚葺穢莠の中に長じて、獨りよく蘭の蕙薰を維持したり。倫敦の流行社會は、氏を以て腦中廉買高賣の外一物なき俗商となしたれども、是れ實に皮相の見にして、歐米諸邦の識者學者は、皆格氏が一點卑俗の所なきを感嘆せり。佛國學士プロスベル、メリミー曰く、格武電ば極めて面白き人物なり。彼は未だ曾て平俗の談を爲さず、亦少しも偏僻を有せず。此點に於て、全く他の英人と趣を殊にせり。格氏が世に在る六十年、未だ搖籃に號泣するの時よりして、憂愁の二字は影の如く、其身に添へり。夫れ邦家の憂は純正なる政治家の常、毫も怪むに足らずと雖も、氏を惱すの魔雲は獨り斯に止らず。一生の功勞以て國を富せるも、一家は常に窮困の中に陥り、其生涯は殆んど友人公衆の慈悲によりて過せるものとも云ふべく、格氏が獨立自恃の精神の之が爲めに傷ましめられたるもの夫れ幾何ぞや。然して氏ハ未だ曾て失望

の深きに陥らず。愁風時に心湖の波を掀ぐるも、風收れば一碧鏡の如く平なり。穀法排撃の時、人氏に問ふて曰く、足下は常に如箇一家流離の憂を帶つ、如何にして公事に奔走するを得らる、にやと。氏答へて曰く、公事に奔走する間は、余は曾て之を思はず。頭枕につけば、余は直ちに眠るなり。

また曾て曰く、

余若し甚しく心を勞せる後、後には亦六時間も引續ひて困難の事に當らざるべからざるを先知しながら、僅五分の間に死魚の如く睡るの能なかりせば、余は今日まで活き永らふる能はざりしならん。

氏が一生の事業は、快活チャフルチスの功與て多きに居れり。

然り而して格氏の生涯は憂愁の群がり覆へるのみならず、また激闘の生涯なり。穀法排撃の曉より、平和戦争の夕べに至るまで、其の衝れる敵、

受けたる嘲罵、實に幾何なるを知らず。甚しきハ血闘の申込を受けたる事までもありしなり。素より氏が意思の堅、氣象の剛、決して非禮の事を假さず。また激戦最中には、聊か言の激烈に涉れることなきにあらず。曾てピールに對する氏が言語の過激なりしとて去朋友の勸告を受けたる時、

幸に阿兄に告げよ、此より後、余は心中の老蛇をば、一層注意して抑ふべし。

と答へて、直ちに改めたるが如き事もありし也。然れども眞實氏が性質を一貫せるものは敦厚静和の氣なりとす。故に其の巴卿を稱するや、即ち曰く、

パルメルストーンは常に寛大なる敵なりき。余は彼が誠實なるを信ず。

また曾て平和論の時、議院に出るの途友人に語て曰く、

斯の如く、幾多好心悪頭情は實ににして智明の輩の怒顔に對せざるを得ざるは、實に余が堪へざる所なり。余は幾度か斯る事をなさざらんことを欲す、然れども此れ終に爲さざるべからず。

また曰く、

大凡そ、如何なる問題に於ても、衷心より發するの異論は、快よく之を寛假する者にあらずんば、終始專賣保護主義の敵たる能はざるもの也。

實に斯くの如く二十五年激闘の生涯に於て、曾て一人の私讎を作らず、身没するの日、味方をして亦敵をして、齊しく哀悼の涙を濺かしめたるものは、果して何によるか。氏が全身渾て一點の苦味を帯びず、其身邊に逝る一種のチャームは、自づから人の愛着を來すものあればなり。郵便

法改革者ローランド、ヒル曾て格氏に書を予へ、私事を以て氏を煩すことを謝して曰く、

御身の會話、書狀等は、恰も舊友に對するが如きの感を余か心中に起さしめたり。余は御身に對面したることの只一回なりしを殆んど忘却せんとす。

其のピールを引着し、プロハムを引着し、其の敵たる保護黨をも引着し、北米の名士を引着し、佛廷の大臣を引着し、ミランの農夫を引着し、露日の皇帝を引着し、見る所、逢ふ處、一見相棄るに忍びざらしむるもの、實に此のチャームなり、引力なり。格氏何んぞ自ら如斯くなるを知らむ。言に發し、貌に露はる、所、實に然るを期せずして然るのみ。

氏が平生の生涯、極めて素朴、一滴の酒を味はず、また風流社會に往來せず、衣服態装の瑣事に到ては、肯て時好を逐はざるが爲め、往々他の嫌忌

を來したることあり。然れども武氏が格武電氏は好奇の人にあらずと云へる如く、氏は好んで異常の行をなす者に非ず。通商條約締結の後、具氏が宴會に招きし時、格氏は左の如く答へたり。

余は眞實を足下に語らむ。余は禮服を着するの勇氣を有たず、而してまた平服にて出席する如き、異常の事を爲すを好まざれば、幸に足下が余を免したまわんとを望む。

誠實

氏が一生の行事多しと雖ども、盡く此一片誠實率直の心より溢れ來らざるなし。其の巴卿の招聘を辭して一生官に就かざりしが如き、人の見て以て異常とする所も、氏に於ては尤も平常とする所なり。要するに誠實の二字は氏が品行の奥底なり、源泉なり。

氏は國教會に屬せり。其の家にあるや、會堂に赴き、説法を聞き、祈禱をなすを常とせり。然れども氏は常に宗教自由を主張し、自動的德義を德憑

宗教に關する意見

せり。曾て曰く、

宗教の感念に就ては、余は熱く同情の感を有す。然れども余は凡て他動的道德家にあらざる人々に向てまた同感を有するなり……斯る事に關しては、余は恒に神學上の議論を避け、ボナパルトの勸言に従ひて、尤も敬虔なる婦人なりし吾慈母の宗教に遵從す。

穀法戰爭中、格氏が屬せる教會の牧師某新に十箇の教會を起すに就き、其盡力を請へる時、氏は之を辭して曰く、

師は常に貧民の家を訪ひたまへばよく知り玉ふならむ、マンチエストル市中數多の勞役者は、食物の欠乏よりして甚だしく困窮し居ることを、生活の最要物已に欠乏して、人民肉體上の情態墮落せるに當ては、德義上宗教上の品格を高ふせんと欲するも、無益のみ……余が執る所は、彼の屋もなき蒼天の蓋下にありて、或は山上に、或は荒野に

説教いづいも、猶其身邊に群集する者等に食物を予ふることを注意し玉へる基督教神祖の模範に適應するものならんか。

氏が宗教上及凡て徳義上の感念は、空理に奔らず、迂濶に流れず、尤も實際に切なりしこと以て見るべし。

然れども是れ格氏が人物を組成するの一側のみ、氏曾て曰く、苟くも鳩の如き温和と、且また蛇の如き智識ある事にあらざるよりは、余は決して爲さざるべし。

氏が一生は實に是れ險危の行路、寸歩を誤れば限りなく身を困難に陥らしむべく、一事を忽にせばマンチエストル一派は保守改進黨の餌となるべし。主義の上より一身の末に至るまで、利害安危の依て係る處實に間に髪を容れず、而して此間に於て、よく暗礁怒濤を避け、大過なく一生を涉りたるものは、實に此の蛇の如き智識のみ、細心の注意のみ、其

の平生收めて温然二八の處女の如きに拘はらず、倏然として時に脱兎の勢をなすは何ぞや。明朗たる其慧眼は常に機微を有無の際に看破するが故なり。時を知り、人を知り、富贍の頭腦は泉の如く計畫を涌出して、一個の目的は其手段を千變万化し、敵を撃つ肯て無謀の擧をなさず、常に敵の最弱點を覘ふて、満身の勢力を其一點に集む。其の困難の戦争に於て、往々意外の勝利を博ふしたるものは、實に此智見によらずんばあらず。

蓋し氏は尤も智見を渴求するの人物なり。糧を裴んで歐米に遊ぶも、忙匆の閑を偷んで燈下に古書を繙くも、皆之が爲めのみ。猶彼の春晝の小蜂が、或は籬邊の薔薇花に遊び、或は崖下の堇菜花に戯むれ、花より花にさまようも、一花一蕊必らず其蜜を吸収して一個の蜂窩に貯へ來るが如く、一事の細、一人の微、未だ曾て之を輕忽に付せず。得る所は互に比較

成功より
評せば格
氏は一流
の演説家
なり
討論家と
しては一
流なり

酌量し、幾度か淘汰して茲に純粹なる識見と變じ來り、以て世故に應ずるなり。之を以て其智見は極めて着實、敢て空漠の弊に陥らず。

格氏は文人にあらず、然も一枝の筆鋒は其の常に利器となせる處、小冊子の如き、殊に書翰の如き、皆共に其功を分つべきものなり。然れども舌鋒は是れ氏が最大の利器なり。音聲風濤の調を有せず、然も明瞭、透徹、悠揚として、會話的なり。使用する所の言語、極めて簡潔にして、平易、論理、明白にして、引證、卑近、想像を用ひず、彫琢を假らず、然れどもまた平凡、卑俗の弊を有せず。武氏の評したる如く、眼に閃き、面に溢る、誠實の情は、其の懇切にして、慧敏、明白にして、精緻なる論理と共に、容易に聽衆の心服を得、永く其印象を腦中に帶し、ひるなり。故に人或は評して曰く、演説、若し事務にして、藝術にあらずんば、(即ち其形容より判すべく、格氏は)英國第一流の演説家と云ふも、不可なるべしと。若其平易、明切、敏捷、簡

鍊なる討論の技倆に到ては、苛刻なる批評家、ヂスレリ、氏の如きすら、第一流を以て之を推せり。

格氏曾て人に語りて
山○上○の○垂○訓○は○二○十○分○に○し○て○讀○み○盡○す○べ○く○主○の○祈○禱○文○は○唱○ふ○る○に○一○分○を○要○す○る○の○み○ヲ○シ○ン○ト○ン○ブ○ラ○ン○グ○リ○ン○皆○一○時○に○十○分○以○上○の○演○説○を○な○し○た○る○と○な○し○。

と云て、議院演説の冗漫に流る、を痛嘆せり。蓋し實務的政治家の要する所は言にあらずして事也、華にあらずして實也。格氏尤も此の實務的政治家の資格に於て富めり。

第十七章 民政の胎内より生れ出たる雙生子

格氏常に武氏を稱して曰く、

彼れ僅かに余が傍にあれば、余は百人の助を得るにましまして心強きを覺ふ。

武氏曾て國會に於て格氏の吊辭を述ふるに當り公言して曰く、

彼を喪へる此の今日まで、余は自ら如何ばかり彼を愛し居たるやを知らざりき。

非は互に諫め、功は共に喜び、艱險なる世波を踏んで、形影相伴ふこと二十年。世人が稱して「民政の胎内より生れ出たる雙生子」と云ひ「十九世紀英國のグラツカイ」と唱ふるも亦宜なり。

蓋し格武兩氏は同心一軌の人物、共に並べ稱すべくして未だ優劣を判

すべからざるの人物なり。安んぞ後人の臆想を以て其の殆んど神聖なる聯紐を破截すべけんや。但其天資稟賦より到りてはまた自から相同じからざる處あり。

格氏武氏より長ずると七歳、身艱苦の中に育ちて、世路の風潮を味ふと尤も深し之を以て其の實際の務に當り、思を運し、策を籌する常に一着の先にある。然して其の理想の光赫灼として、盤根錯節の間をば一氣貫通するに至りては、格氏常に武氏に譲れり。格氏は外温にして、内毅、其寛洪濶大の量、柔和温潤なる優麗の光りは、近く者をして盡く其朋たらしむ。武氏は内温にして、外毅、清高峻厲の徳は、恰も巉巖絶壁の如く、望むべくして就くべからず。故に格氏は常に人の愛着を得、武氏は常に人の畏敬を博ふす。彼等は齊しく熱心を有す。然れども格氏の熱心は其明白なる信向より輝き來り、武氏の熱心は深く道義の根抵より燃へ出づ。格氏は

人の感情を知らず苟くも常情と論理を以て戦ふの場所は即ち是れ其擅場なり武氏の胸中に炎々たるは盡く是れ感情の焰なり之を以て其雄辨精彩は常に變難激動の際に發揚す格氏は大教師なりよく人を説服す武氏は預言者なりよく人を感激す彼は自から下て手を挈へ此ハ高きに上て人を命ず彼は以て首領たるべく此は以て點火者たるに足る若し格氏を以て春風となさば武氏は即ち白雪なり彼は雲を帯び霞を纏ひ泰然として八州に蟠るの高山なり此は万丈の光焰空を摩して天動き地轟く噴火山なり彼は千尋の海の如く此は百尺の大瀑布に似たり。

見るべし渠曹は殆んど互に相結依するの命運を有して生れ出たるが如きを。

千八百六十四年八月米國カリフォルニア州ヨセマイトの谷中に矗立

せる二株の大樹に義侠の米人等は白大理石の板を掲げ其一に格武電の名を署し他の一に武雷土の稱を刻せり爾來二十有五年杖をヨセマイトの谷中に曳く者毎に銘を此二大樹下に止めて佇立すること久しと云ふ。

第十九世紀の英國政治世界は素より人物に乏しとなさず曰くピール、曰くオーコンキル、曰くラッセル、曰くパルメルストーン、曰くヂスレリ、曰くグラッドストーン、其他以て一代の歴史に光彩を添ふべき者比々として肩相摩せり然り而して此百花叢裡に在て彼造化の偉兒等は昂然として聳立せり彼等素より露艶風香を有せざるべし然れども其勁然たる幹根は風雷霜雪の間を冒して鬱蒼たる枝葉の蔭ハ幾多の蒼生を覆ひ年盡きて枯死するも根抵八方に蔓延して以て國家の底基を固ふするを見る偏僻の眼ハ愛國の心なしとなすとも有識の心は其の

社會の大忠僕たるを認むべし。十九世紀の歴史は恰當の地位を予へざるとも、百世の子孫は平民的政治家の模範を以て理查士格武電、如温武雷土の二氏に歸すなるべし。

格武電終

明明明明明
治治治治治
廿廿廿廿廿
五三三二二
年三三二二
一三三十二
月月月二月
十六十五三廿
日日日五四
三再再日日
版版版出印
印出印版刷
刷版刷
并出版

定價金貳拾錢

發行者 垣田純朗
東京市京橋區日吉町四番地

印刷者 梅村之芳
東京市芝區新堀町十四番地

發行所 民友社
東京市京橋區日吉町四番地

印刷所 公友舍
東京市赤坂區溜池町五番地



版權所有

●民友社出版書目

ゼームス、ブライース著 人見一太郎譯

合本二冊 正價四圓 運賃二十錢

平民政治

本書「アメリカン・コンメンタリーズ」はグラッドストーン派自由黨中錚々たる名士前の外務次官
 澤ームスブライース氏の著なり本書の空前絶後の大名著たるものは歐米各新聞の公評歐
 學者政治家立法家の定論已に之を證明す吾人は喋々廣告の誇張を爲すを要せざる也今二
 個年二十四個月の歳月を積んで譯本始て大成し之れを合本にして江湖に分たんと欲す政治
 家、法律家、議員、學者の必携すべきは勿論歐米特に米國政治機關の如何にして運轉する
 を知らんと欲する有志家の政治法律の蘊奥を極めんと欲する學生は必ず一讀せざる可らず
 讀者の便を計り左の如き廉價を以て發賣す江湖諸彦速に御申込は必らず特別廉價●廿五年一
 月三十日迄に本社直接代廉價を以て發賣す江湖諸彦速に御申込は必らず特別廉價●廿五年一
 價御拂込の諸君には特別廉價二圓五拾錢

五版新日本史上

紙數 四百餘頁
 定價 四圓十錢
 郵稅 六錢

竹越與三郎著
 會の一大問題となりたる新日本史は
 一日本歴史界に一生面を開き批評社
 事實を訂正し材料を増加し大に面目を一新し
 已に四版を賣り盡し今や

●民友社出版書目

ゼームス、ブライス著 人見一太郎譯

合本二冊 正價四圓 運賃二十錢

○平民政治○

ゼームス、ブライス著 人見一太郎譯

ゼームス、ブライス著 人見一太郎譯

本書「アメリカン・コンメンツ」はグラッドストーン派自由黨中錚々たる名士前の外務次官
ゼームス、ブライス氏の著書なり本書の空前絶後の一大名著たるを以ては歐米各新聞の公評
學者政治家立法家の定論に之を證明す吾人は喋々廣告の誇張を爲すを要せざる也今
個年二十四個月の歳月を積んで譯本始て大成し之れを合本にして江蘇に分たんと欲す政治
家、法律家、議員、學者の必携すべきは勿論歐米各國政治機關の如何にして運轉するか
を知らんと欲する有志家の必携すべきは勿論歐米各國政治機關の如何にして運轉するか
讀者の便を計り左の如き廉價を以て發賣す江蘇諸彦速に御申込は必ず一讀せざる可らず
月三十日迄に本社直接代廉價を以て發賣す江蘇諸彦速に御申込は必ず一讀せざる可らず
價御拂込の諸君には特別廉價三圓五拾錢以後は正價四圓に復すべし

竹越與三郎著

○五版新日本史上○

紙數 四百餘頁 定價 四圓十錢 郵稅 六錢

一日本歴史界に一生面を開き批評
會の一大問題となりたる新日本史は
事實を訂正し材料を増加し大に面目を一新し
已に四版を賣り盡し今や

て五版に上れり速やかに購讀あれ

○四版武雷土○

美麗なる肖像入 紙數 百五十頁 定價 四圓十錢 郵稅 六錢

一昨秋出版以來大に江湖の喝采を博し
已に數千部を賣り盡せる武雷土傳は
論を補ひ全然面目を一新し又一進して四版を
發賣せり 江湖の諸彦未だ巻を手にせざるの士は速に一本を購讀せよ已に一讀せら
れたる諸君は再讀の勞を吝むなかれ

民友社編纂

總撰舉 解散始末

一冊 金拾錢 郵稅 貳錢

撰舉の準備は、今や懸けて朝野人士の雙肩に在り、此時を以て此書生る、豈夫れ偶然ならん
や、則ち彼れ吏黨誣妄の妖霧を排かんものは、實に此書ならん、我國民を警醒覺悟せしめん
もの、實に此書ならん、若し議論の硬直なる、文の明快なる、紀事の精確なるに至りてハ、我
社獨特の在る所、更に呶々を要せず、乞ふ滿天下有志の士速かに一本を購讀せよ
目録○衆議院の成行○貴族院の成行○各黨派の形勢○貴族院の黨派○豫算案の顛末○解散
の理由○總撰舉及國民の心得○民黨今後の方針

森田思軒先生譯

三探偵ユーベル

及ビクラウド

美麗なるウヰクトル、ユーゴー肖像入
定價 拾貳錢

探偵ユーベル及びクラウドは佛國の大文學者ウヰクトル、ユーゴーが超群出類の靈腕を以て極力結撰する所の名著にして事實に於ても文章に於ても天下に敵なきものなり共に思軒森田先生の精鍊簡勁なる筆を以て國民之友に譯載せられ荷も文學に志あるの徒は先を争ふて閱讀したり嚮に探偵ユーベルを一冊子と爲して發賣するや倏忽の間江湖の諸君請ふ今や**第二版**に印刷に着手するクラウドを併せ以て印刷せり江湖の諸君請ふ

草野茂松村上典吾編輯

再版 今世名家文鈔

定價 二拾錢
郵稅 四錢

本編載する所皆を新日本文壇に撰擇一に作者の指示寄贈に係るものなれば流雄視する名家の傑作にして其の**撰擇**に作者の指示寄贈に係るものなれば流且つ其の文脈には今軀あり古軀あり和文あり漢文あり普通文あり其の文章には論策あり小説あり小説あり**光彩陸離**加ふるに其の文悉く**高雅純潔**獨り**作文の規**範たるに止らず家庭學校加ふるに其の文悉く**高雅純潔**獨り**作文の規**範間に諷諭して以て青年**修養**の一助たらすんばあらず購讀の諸君必らず其の

田口卯吉、肥塚龍、尾崎行雄三氏序 徳富猪一郎著

新日本之青年 特別廉價 二拾錢
郵稅 四錢

新日本青年の指南車、新人民の烽火臺、議論新警、文章奇拔、有用の好著書也

著者自から題して曰く「本書故ありて發賣を社會に絶てり、今や更らに之を刊行するは、教育界の現状に就て、大に慨する者あるか故也、願くば天下の識者をして、本書の是非を判せしめよ」と、江湖の君子幸に一讀の勞を吝じ勿れ

國民叢書 一冊 進歩乎退歩乎

定價 拾錢
郵稅 貳錢

○目次○保守的の反動の大勢○新保守黨○日本國民の氣風○明治年間の鎖國論○外人の諛言果して幾何の價値ある○民、信なくんば立たず○國歩艱難に處する國民の自信力○廿餘年間國力の發達○改革の偉業は遠大を期せざる可からず○偉大なる國民以上十篇、我が國民が區々たる保守的の反動の勢に驅り去られず將に張膽明目以て東洋の一大國民たる天職を全す可き論した雄勁奇峭の大文字也

國民叢書 二冊 人物管見

定價 拾錢
郵稅 二錢

當今我邦の名士を論じ盡して識鑑透徹筆鋒銳利無數の人物紙上に活躍す所謂天下英雄在眼中のもの耶非耶

徳富猪一郎序文 竹越與三郎編纂

格朗空

美麗なる肖像入
全一冊 二百四十一頁
定價 二十錢 郵税 四錢

歴史上の大難問、英國史の絶頂、鐵騎の首領、大抗擊家、沈摯、嚴肅、雄烈の大改革家、
ロムウエの傳は著者一氣呵成の雄麗明快の筆を以て述作批評せられたり苟くも偉人傑士の眞面目を識らんと欲する者は本書を讀ますして復た何くにか得ん

再版 國民小説

特別廉價 十二錢
郵税 四錢

一口劍(幸田露伴)舞姫(鷗外漁史)蝴蝶(美妙齋主人)細君(春の屋主人)良夜(饗庭篁村)楠木(學海居士)流轉(北邨散士)新編破魔弓(南翠外史)拈華微笑(紅葉山人)天東號航海日記(思軒居士譯)
以上は我邦文學の明星たる諸君が國民の友大附録に掲載せんが爲に特に手腕を揮はれしものにして今や集めて一廉價にして面白めて珍奇の好冊子たるは購讀冊子となせり其極めて

第二國民小説

特別廉價 七十五錢
紙數 三百七十頁
郵税 四錢

第一國民小説出づ、如何なる装ひを以て、名匠巨手の織り成せる爛然たる、燦然たる百幅

の錦繡を以て、曰く、思軒氏の西文小品「伊太利の四人」曰く、嵯峨の屋氏の「夢現境」「空蟬」曰く南翠外史の「罔兩」曰く二葉亭四迷氏の「あひまき」曰く賣新生譯の「懺悔」曰く驚濤生の「羅、武烈士號」の譯述、曰く抱一庵氏の「曇天」曰く湖處子の「落武者」曰く白水居士の「石美人」曰く西邸隱士の「空屋」曰く鷗外氏譯述の「惡因縁」「地震」「うきよの波」是なり讀者は已に國民小説第一に於て非常の妙味を喫し得たり曷ぞ此卷に於て然らざるを得ん只開き見よ、知る所あるべし

湖處子 宮崎八百吉君著

八版 歸省

紙數 百五十七頁
定價 十五錢 郵税 二錢

歸省の如何に佳趣に富み如何に社會に愛せらるゝかは今更ら喋々を須わざる可し頭上八版の二字は能く之を説明す江湖の君子後れて悔ゆるを莫れ

横井時雄氏編輯 貴顯諸大家序跋

活見家の 故横井平 四郎氏著 小楠遺稿

紙數 大約六百頁
定價 一圓二十錢 郵税 十四錢

活歴史 經世實用 の大文字 再版 國防論

定價 十五錢 郵税 二錢

心神の糧
食處世の
秘寶

三版一語千金

定價
稅價
二五
錢錢

數百件の金言を増加したり

檜前保人 第一冊

上野岩太郎氏著 第二冊

池本吉次氏著 第三冊

緒方直清氏著 第四冊

梶原保人氏著 第五冊

政治一斑

國民之友自第一號至第八號社説及特別寄書

議
員
撰
舉

{錢三各價廉別特}

{受申不稅郵}

國民之友自第十五號至第廿四號社説
國民之友 第一集
國民之友 第二集

紙數三百二十頁
定價二十錢
郵稅四錢

賣切

紙數二百二十八頁
定價十五錢
郵稅四錢

國民之友自第廿五號至第卅六號社説
國民之友 第四集

紙數二百六十八頁
定價十八錢
郵稅四錢

文學博士 元良勇次郎氏著
佛國不換紙幣發行始末並信用論

全 紙數七十七頁
定價十錢 郵稅二錢

佛國法律博士 本野一郎氏述
多數撰舉之弊 矯正策

全 紙數八十頁
定價十五錢 郵稅二錢

自第十四號至第廿四號十一冊合本
國民之友 第二卷

明治二十年 改正 四拾錢

自第廿五號至第卅六號十二冊合本
國民之友 第三卷

二十一年 同 四拾錢

自第卅七號至第五十四號十八冊合本
國民之友 第四卷

より一年 同 五拾五錢

自第五十五號至第六十八號十三冊合本
國民之友 第五卷

同二年 同 五拾錢

自第六十九號至第八十六號十八冊合本
國民之友 第六卷

同四年 同 六拾錢

郵稅
稅
を
要
せ

第百八十七號至第百四號十八冊合本

○國民之友第七卷

自第百五號至第百二十二號十八冊合本

○國民之友第八卷

到る 同 六拾錢
活歴 同 七拾錢
史也 同

德富猪一郎編纂 久保田米僊書

誕生日

一冊 金十五錢
郵税 二錢
初版賣切れ再版す

○斯書は父母兄弟姉妹朋友の誕節を記憶せんか爲め其の誕生日を記録する冊子也

○卷中の一面には餘白を剩して其の人々をして自から其の姓名を誕節に相當する月日の欄内に記録せしむるを得可し是れ獨り其の誕生日を記録するのみならず併せて父母兄弟姉妹朋友の手蹟帳たるを得可し

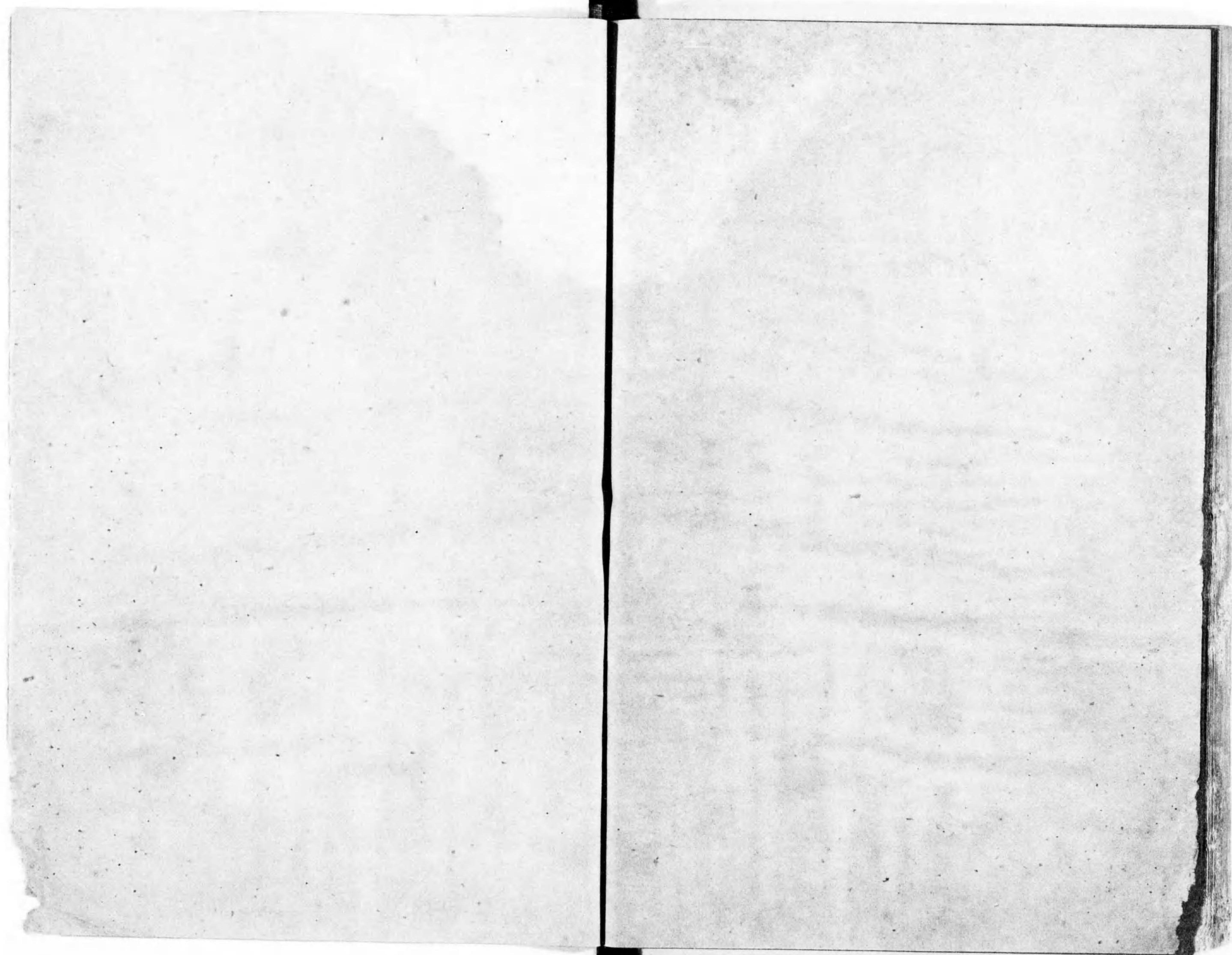
○他の一面には東西の聖經賢傳詩歌金言を掲げ以て晨夕の諷誦に供す

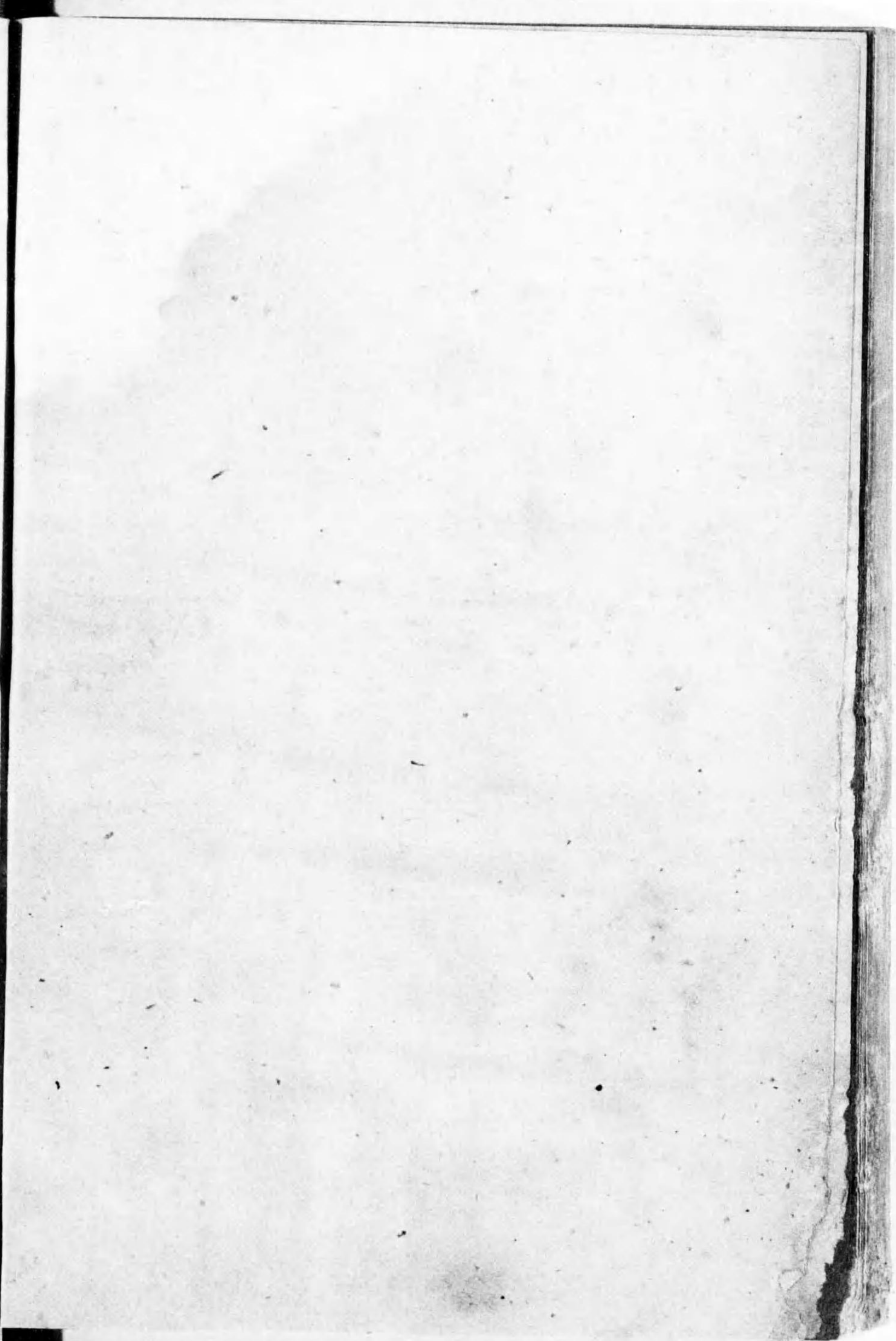
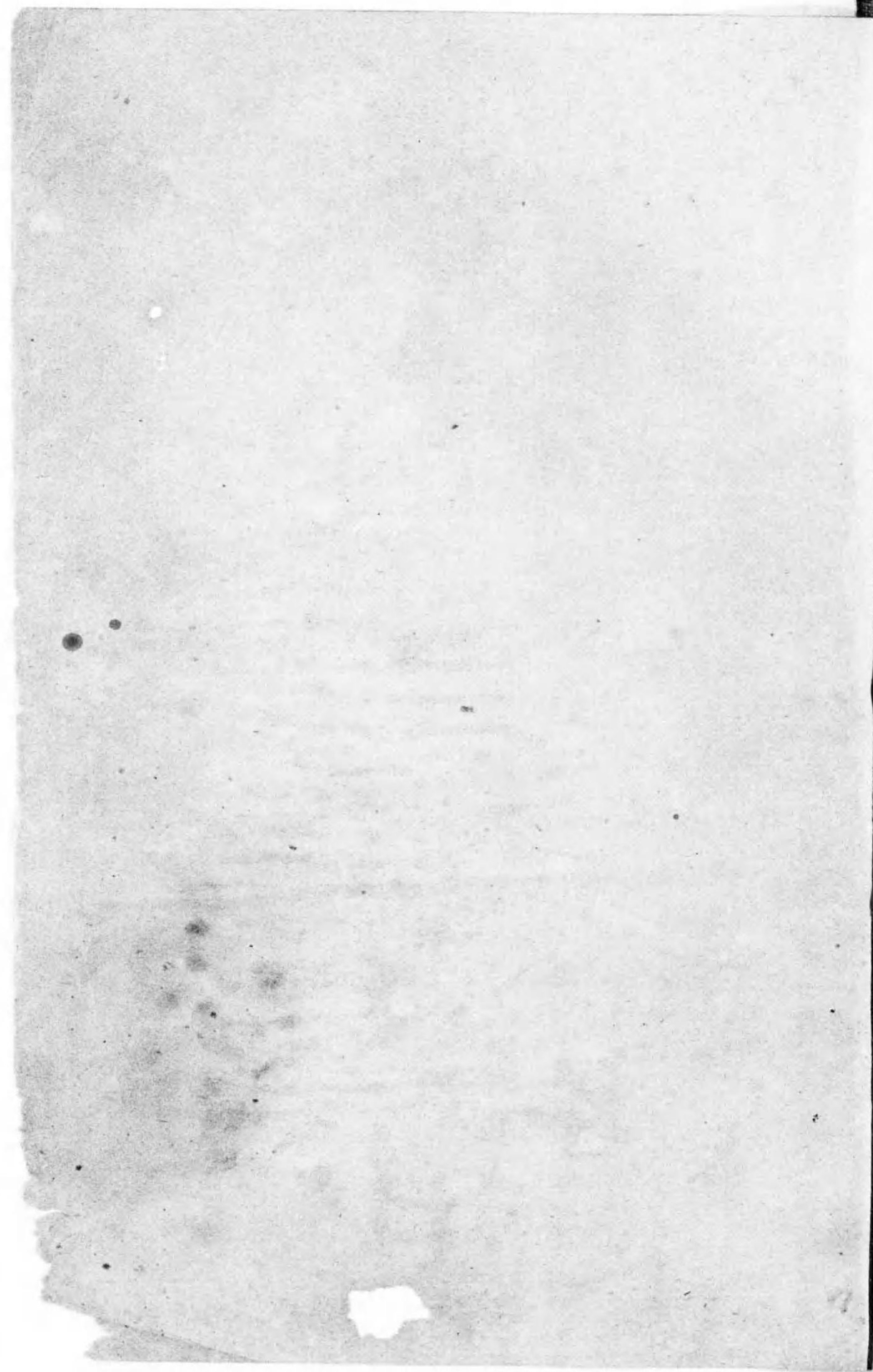
○又た米僊子の清談奇逸なる一年の期節に相當する細書七十餘を挿めり

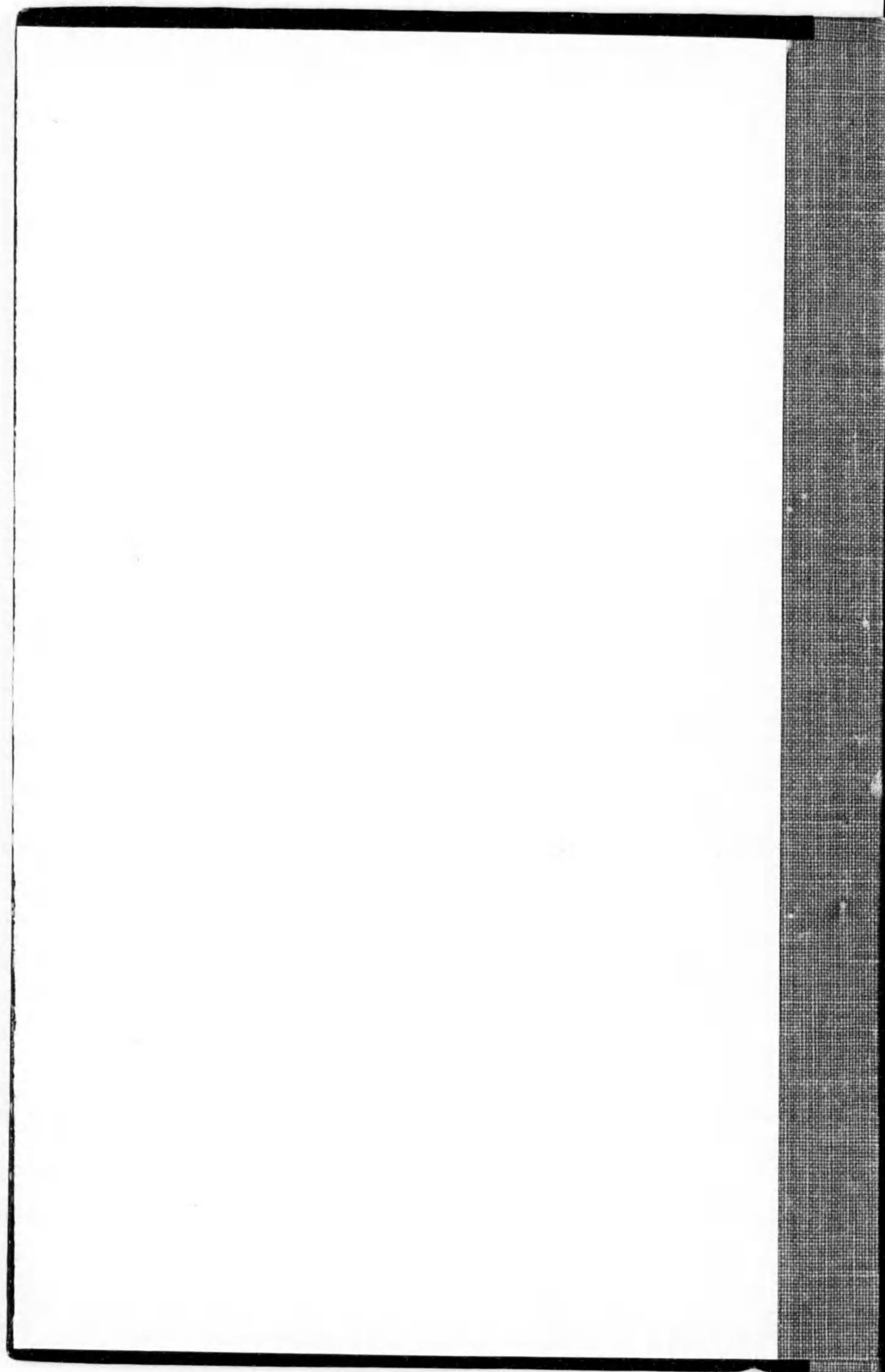
○斯書を編纂したる主旨は獨り自個の誕生日を紀念し祝し且つ勵むに止らず併せて其の父母兄弟姉妹朋友の誕節を祝して懃懃傾倒の情を表するにあり是豈に人生の和樂を増し社會

の情緒を温むる所以にあらずや

○冊子小なりと雖淡麗清楚且つ各種の便宜備る金蘭簿たるを得可く備忘録たるを得可く金誠集たるを得可く又文苑繪畫の奇觀たるを得可し何人も一本を持す可き要書と信ず







終